

島根県に侵入したハラアカコブカミキリとその防除

島根県中山間地域研究センター 福井 修二

ハラアカコブカミキリ (*Moechotypa diphysis*) (以下、「カミキリ」と略記) の幼虫はクヌギ、コナラなどシイタケ栽培用の原木を食害することによってシイタケ子実体の発生を減少させる害虫である。本種の海外での分布はロシア沿海州、中華人民共和国東北部から朝鮮半島が知られ、日本では長崎県の島嶼である対馬にのみ生息していた。しかし、1970年代に九州本土のシイタケ栽培地で生息が確認され、その激しい食害から栽培地ではシイタケ原木への加害が問題となった。九州本土への侵入は、対馬からカミキリの付着したシイタケ原木の移入が原因と推察されている。その後、国内では成虫の移動や不用意なシイタケ原木の移送によって生息域を拡大した。島根県では1990年に吉賀町のシイタケ栽培地で初めて確認されて以降、生息域を拡大してシイタケ原木で被害が発生している。

本種による被害の回避を図るため、生息状況・生態を調査し、防除試験を実施した。

- 1) 生息調査：2003～4年、県西部～中央部のシイタケ栽培地において、成虫の有無、幼虫の原木への加害状況を調査した。その結果、生息を認めた地域は吉賀町、益田市、浜田市、江津市、邑南町（旧羽須美村は未確認）、美郷町、大田市であった。調査した原木の多くは遠隔地からの移入ではなく、栽培地周辺の山林から伐採・調達されたものであったことから、カミキリは既にこれらの地域に広範囲に定着していると考えられる。
- 2) 生態調査：2003年に邑南町のシイタケ栽培地で発生消長を調査した。また2003～6年、野外で捕獲したカミキリ成虫を飯南町の中山間地域研究センターの野外網室内で飼育して生態を調査した。本種の生活史は、成虫で越冬し3月下旬から活動を開始し、7月中旬まで後食、産卵行動を認めた。孵化した幼虫は原木の樹皮下、材部表面を摂食して成長する。その年の8月下旬頃から蛹化したが、一部は幼虫のままで越冬して翌年の同時期に蛹化した。成虫が加害木から脱出する時期は9月中旬～10月中旬で、9月下旬に集中した。脱出した成虫はクリ、コナラ、ヤマボウシ、ヤマザクラなど、各種の落葉広葉樹の枯れ枝の樹皮を後食したことから、野外においても広範な樹種が摂食対象であると推察する。幼虫の加害を認めたシイタケ原木の樹種はコナラ、クヌギ、アベマキ、スダジイ、ノグルミを確認し、特にコナラへの加害を多く認めた。本種の加害樹種であるコナラ、クヌギの枯死木は在来の多くの昆虫、特にカミキリムシ科、ゾウムシ科、キクイムシ科、ナガキクイムシ科甲虫の餌資源となっている。餌資源を巡って在来種との競合が推測されるが、本種が与える影響の程度は不明である。
- 3) 防除試験：2003年3月上旬に、邑南町の栽培地で植菌した原木全体に5mmメッシュのナイロン製防風ネットを被覆したものと無被覆のものを設置して産卵の防止効果を調査した。2004年秋と2005年春に飯南町の野外網室内で天敵微生物（ポーベリア・ブロンニアティ）を原木上に設置して成虫の殺虫効果を調査した。その結果、ネット無被覆の原木には平均3.1個の産卵痕を認めたが、ネット被覆したものは産卵痕を認めず、カミキリの侵入・産卵を回避することを確認した。また、ポーベリア・ブロンニアティ菌培養不織布を原木上に設置することによって、カミキリ成虫を高率に殺虫した。設置時期はカミキリ成虫が原木に集中する春期の設置が効果的であった。